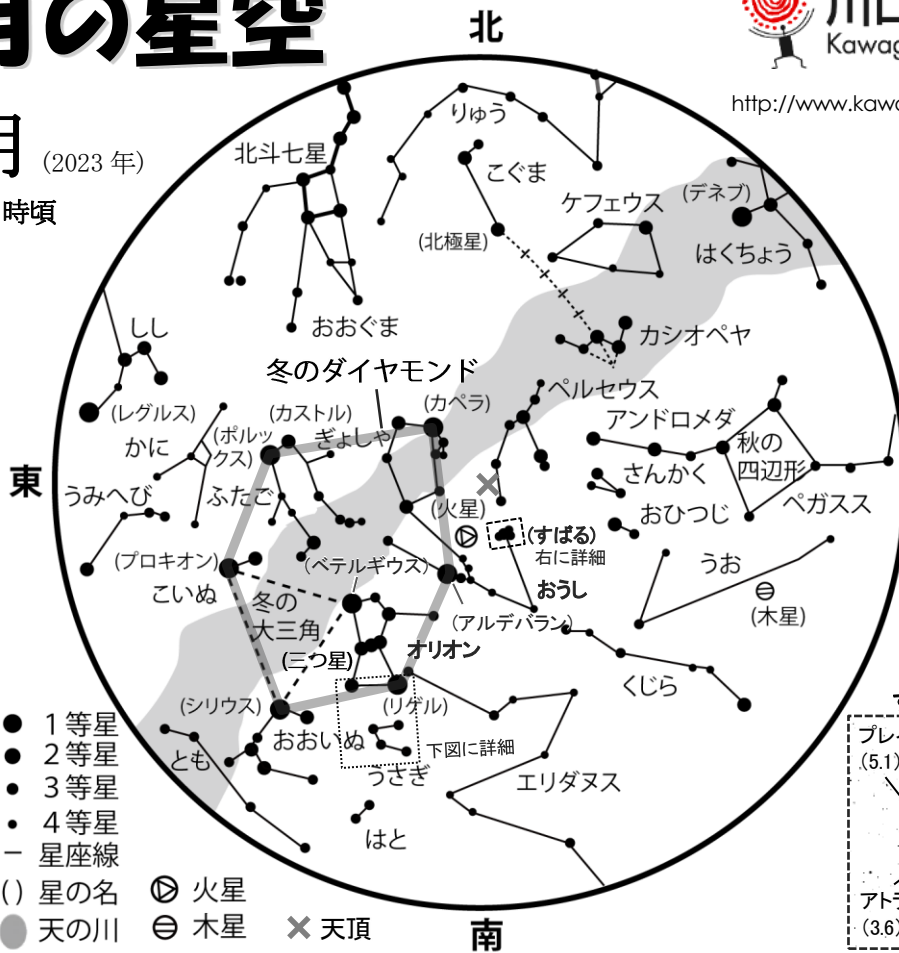


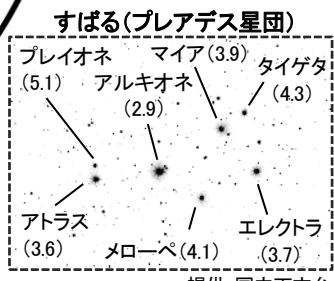
今月の星空

1月 (2023年)

中旬 20 時頃



星図の見方
自分が見ている方角を下にして、(西の空を見るときは西を下にして持つ) 頭の上にかざして見ます。



提供: 国立天文台

- 1等星
- 2等星
- 3等星
- 4等星
- 星座線
- () 星の名
- ⊙ 火星
- ⊕ 木星
- × 天頂
- 天の川

月 齢 ○ 満月 7日、● 下弦 15日、● 新月 22日、● 上弦 29日

惑星情報

水星 日の出前 南東(いて座 0等)※下旬のみ
金星 日の入後 南西(いて→やぎ→みずがめ座 -4等)
火星 夜のはじめ頃 南(おうし座 -1→0等)
木星 夜のはじめ頃 南西→西(うお座 -2等)
土星 日の入後 南西(やぎ座 1等)※中旬まで

★冬のダイヤモンドと火星とすばる

東から南の空にかけて、四季の中でも特に1等星が多い冬の星座たちが昇ってきました。「三つ星」が目印のオリオン座を目印にして、手始めに「冬の大きな三角」を、さらに広い範囲を見渡して「冬のダイヤモンド(冬の大きな六角形)」を見つけてみましょう。加えて、この冬は1等星のアルデバラン(おうし座)の近くには、-1等ほど(※1月の光度変化-1.2→-0.3等)の火星があり目立っています。

アルデバランも火星も似たような赤く見える星ですが、その色に見える仕組みは異なります。自ら光を放つ恒星の色は、星の表面温度を表します。赤色巨星であるアルデバランは、表面温度が約4千度と低い^{せつかつよく}ため赤っぽく見えます。一方、火星は太陽の光に照らされて輝き、その表面の赤褐色の土の色(鉄さびの成分が多い)が見えています。また、火星を目印にして「すばる(プレアデス星団)」を見つけましょう。肉眼でも5~7個ほどの星が集まって見える星団です。3等星が1個、4等星が5個(上の星図、右下参照)あり、市街地からでも、ぼんやりとその存在がわかります。低倍率の望遠鏡や双眼鏡などで見るとよりたくさんの星が群れる様子がわかるでしょう。

★2023年(卯年)の年初めはうさぎ座から

オリオン座の足元には、うさぎ座が見つかります。紀元2世紀にプトレマイオスがまとめた48星座にも含まれる歴史の古い星座です。右図のとおり、3等星が4つ(α, β, ε, μ)とその他の4等星を繋ぐと、うさぎの姿が想像できます。オリオン座を目印に、比較的明るいα星やβ星から探してみましょう。

また、右図にあるR星は、望遠鏡で見ることができる星で、その赤さから「クリムゾンスター(深紅の星)」の愛称があります。炭素星というタイプの星で、表面温度が低いことに加え、恒星表面にある炭素が青い光を吸収するために、より深い赤みを帯びた輝きを放っています。

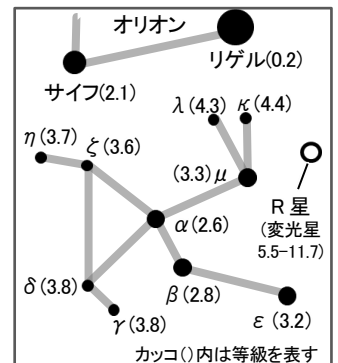


図 うさぎ座の星と等級
ステラナビゲータを元に作成